

クールに進化けん玉熱く

けん玉と聞いて、どんなイメージが浮かぶだろうか。「昔遊び」「子どもがやるもの」と思う人も多いはず。実はここ数年、けん玉の楽しみ方は広がり、県内でもじ

末時忠。ストリート系ファッションに色とりどりの個性的なけん玉。世界中の若者たちが、鮮やかなパフォーマンスを披露している。連続技を繰り出す姿は、ダンスをしているように見える。

けん玉の原型は各国にあると言われているが、私たちになじみ深い現在の形は大正期の日本で誕生した。長い年月を経て5年ほど前、アメリカなどでアクロバティックなパフォーマンスを織り交ぜた「KEN DAMA」が、一部の若者らの間で人気を呼んだ。逆輸入する形で、日本でも幅広い世代でけん玉プレーヤーが増えている。

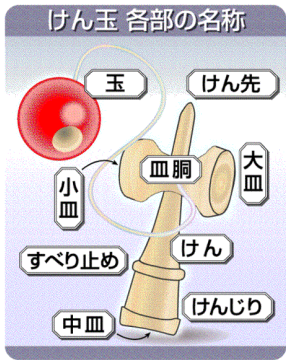


パフォーマンスを披露する「新潟けん玉部GATAKEN(ガタケン)」1日、三条市

「芸工房けん玉教室」の子どもたち13日、新潟市南区

動画 新潟日報7アで見られます





やってみよう基本の「大皿」

全ての技の基本となる「大皿」の流れを、塚口さんに教えてもらった。

①大皿の構え。人さし指と親指でつまみ、薬指と中指で小皿のふちを支える。肘は90度ほどに曲げる。足は肩幅に開き、片足を少しだけ前に出す。

②腕や肩の力は抜く。ひざをしっかりと曲げて、体全体を使うイメージで玉を引上げる。

③ひざのクッションを使って、玉を受け止める。



芸工房けん玉教室の練習風景＝3日、新潟市南区

新潟南区の教室

カツ、カツ、カツ…。練習会場は「けん」と「玉」がぶつかる軽やかな音に包まれ、大人から子どもまで一様に真剣なまなざしをけん玉に向ける。

新潟市南区の白根地域生活センターで開かれている「芸工房けん玉教室」では、けん玉の技の精度を高めようとメンバーが練習を重ねている。公益社団法人日本けん玉協会(本部・東京)の新潟県支部長で、講師の塚口真穂登さん(43)は「大人になってから始めても、1〜2年で難関のけん玉認定五段に合格する人も少なくない」と話す。

教室は、塚口さんが2年ほど前に開設した。「けん玉をきちんと練習できる場がほしい」という知人らの声を受け、ニーズを感じたという。口コミなどで評判が広がり、月2〜3回の教室に20〜30人ほどが集まる。

1月下旬に開かれた教室には、園児から40代の約20人が参加した。参加者のレベルに合わせた技のリストに沿って次々と技に挑戦。塚口さんは「雑にしないで、丁寧に足をもう少し閉じてみて」と指導していた。

教室の後半には、公式大会に基づいた練習試合が行われた。対一で交互に課題の技に挑戦し、成功率を競う。試合の前後には「礼」。トーナメント上位の試合では、皿やけん先だけでなく皿のふちやすべり止めまで、けん玉全体とひざのばねをフルに使った大技が飛び出していた。

小学生の息子と参加する大学職員の新野亜紀子さん(41)は「新潟市西区の萩野亜紀子さん(41)は「絶対にできない」と思うような技も、こつこつ続ければ必ずできるようになるのが魅力」と笑顔。パートの山田美実さん(37)は「同区」は「気軽に持ち運べて、親子のコミュニケーションにもなる。かわいいい柄のけん玉がたくさんあるのも楽しい」と話した。

教室では、メンバーを随時募集している。参加費は、一族につき月100円。塚口さんにメールで問い合わせる。メールアドレスは、hoto1974@gmail.com

親子で真剣大技に達成感

加者のレベルに合わせた技のリストに沿って次々と技に挑戦。塚口さんは「雑にしないで、丁寧に足をもう少し閉じてみて」と指導していた。

けん玉認定 十級から十段まで

「けん玉認定」とは、日本けん玉協会がけん玉のレベルを認定する制度。十級〜十段まで。協会が認定した審査員がいるけん玉教室やイベントなどで認定審査を受けることができる。

協会認定の「競技用けん玉」を使用し、

規定の技を定められた回数以上、成功できるかどうかを判定する。

例えば、基本技「大皿」を10回に1回成功させるとけん玉道十級の認定を受けることができる。ちなみに私は、玉を持ってけんを振り、けん先を玉の穴に収める「飛行機」など数種類の技をクリアし、五級に合格した。